

## 社会科教育教材「稲むらの火」から学ぶこと

伊藤純郎\*

### はじめに

東日本大震災直後の2011（平成23）年4月から使用された光村図書出版発行の小学校5年生用国語教科書『国語五 銀河』に、「百年後のふるさとを守る」という教材が掲載された。この教材は、国定教科書時代の1937（昭和12）年から1947年まで尋常小学校5年生用『小学国語読本（尋常科用） 卷十』とその後6年生用『初等科国語六』に掲載された、地震の直後に津波の襲来を察知した主人公が収穫した「稲むら」に火を放ち、その燃え盛る炎で海辺近くの村人たちを高台に避難させ、命を救うという内容の「稲むらの火」をベースにした文章である。執筆者は、東日本大震災直前に『津波災害－減災社会を築く』（岩波新書、2010年）を刊行して来たるべき津波被害への社会的対策の重要性を説いた河田恵昭関西大学教授で、文章は2008年に執筆され、教科書への採用は東日本大震災前から決まっていたという。

「稲むらの火」は、1933年10月に文部省が行った国定国語教科書『小学国語読本（尋常科用）』の「資料募集」に、和歌山県日高郡南部尋常高等小学校訓導中井常蔵が応募し入選した作品「津浪美談」で、1896（明治29）年6月15日の三陸地震に触発されたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が1854（安政元）年陰暦11月におきた安政東海・南海地震のさい紀州和歌山藩広村（現有田郡広川町広）でヤマサ醤油七代目当主であった濱口儀兵衛（梧陵）による実話をもとに執筆した「A Living God（生神様）」を、小学校児童向けに「翻作・翻案」したものである<sup>1)</sup>。「A Living God」は、翌年に刊行された『Gleanings in Buddha-Fields（仏の畑の落穂）』の冒頭に収録さ

れ、「tsunami」という言葉を初めて世界に紹介した作品としても知られている。

以上から、現在の国語教育教材「百年後のふるさとを守る」は、戦前の国定国語教科書『小学国語読本』に掲載された国語教育教材「稲むらの火」（中井常蔵「津浪美談」）、さらには中井が「翻作・翻案」したラフカディオ・ハーン「A Living God（生神様）」、そしてハーンが参照した安政東海・南海地震のさいの濱口儀兵衛の行動という歴史的経緯を背景に執筆された作品であることがわかる。

国語教育教材「稲むらの火」は、1950年代に小学校・中学校国語教科書に「いなむらの火」「浜口五兵衛」などのタイトルで掲載されたが、その後の国語教科書から姿を消した。

一方で、防災教育教材としての「稲むらの火」に対する関心は<sup>2)</sup>、1983年5月26日に秋田県沖で発生した「日本海中部地震津波」を契機に高まり、さらに2004年12月26日にスマトラ島沖で発生した巨大地震とインド洋大津波災害以降、急速に広まった。2005年3月には戦前の教育紙芝居「稲むらの火」が復刻・出版され<sup>3)</sup>、アジア防災センターにより防災教育普及活動の一環としてバングラデシュ、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、フィリピン、シンガポール、スリランカの8ヶ国・9言語に翻訳され、ホームページでも公開されるなど、防災教育教材として活用されてきた。

周知のように、未曾有の複合災害となった東日本大震災の経験から得た教訓をふまえ、地震・津波・山崩れなど以前から頻発していた災害の歴史や伝承を問い直す作業が行われている。こうしたなか、「稲むらの火」に対する関心も、東

\*筑波大学

日本大震災以降いっそう高まっているが、ここでは防災・減災教育教材としての「稲むらの火」の重要性のみを指摘する傾向が強く<sup>4)</sup>、「稲むらの火」と安政東海・南海地震や濱口儀兵衛の行動、ハーンの「A Living God」との関係など、歴史的経緯に着目する視点が弱いように思われる。

本稿では、こうした状況をふまえ、安政東海・南海地震と津波の襲来、その後の広村の復興事業における濱口儀兵衛の行動に関する歴史と伝承が、明治期のハーン「A Living God」、戦前の国語教育教材「稲むらの火」、平成の国語教育教材「百年後のふるさとを守る」のなかで、どのように読み解かれ、伝承されたのかについて整理する作業を通じて、社会科教育教材としての「稲むらの火」の新たな可能性について考察したい。

## 1. 濱口儀兵衛とハーン「A Living God」

まずは、安政東海・南海地震と津波の襲来、その後の広村の復興事業における濱口儀兵衛（梧陵）の行動を簡潔に紹介する。

主人公である濱口儀兵衛（梧陵）は、1820（文政3）年1月17日、元禄年間に銚子で醤油醸造を始めヤマサ醤油を起こした濱口家の分家三代目七右衛門の長男として広村に生まれ、1853（嘉永6）年3月本家の家督を相続し、七代目儀兵衛と改名した人物である<sup>5)</sup>。

濱口梧陵記念館発行の展示要覧『稲むらの火の館』<sup>6)</sup>や広川町発行『稲むら燃ゆ - 海嘯と闘った男・浜口梧陵の軌跡』<sup>7)</sup>によると、安政東海・南海地震と津波の襲来、その後の広村の復興事業における濱口儀兵衛（梧陵）の行動に関する「歴史」は、以下のようなものとして記憶されている。

1. 「枯れた井戸の水」…儀兵衛が広村に帰郷していた1854年陰暦11月4日（陽暦12月23日）、安政東海大地震が発生、村人は広八幡神社に避難し被害はなかったものの、翌5日昼に「井戸の水が涸れた」との報告が儀兵衛のもとに寄せられる。

2. 「大地震だ！津波だ！」…11月5日夕、安政南海大地震が発生し、紀伊半島一帯を大津波

が襲う。儀兵衛は波にのまれながらも、村人に広八幡神社への避難を呼びかける。

3. 「命の火、稲むらの火」…津波は川をさかのぼり家屋や田畑を押し流したあと、すごい勢いで海へ引く。暗闇のなか儀兵衛は、「稲むら」（和歌山の方言で「ススキ」という稲束を重ねたもの）に火を放ち、津波に襲われた村人をこの火を目印に誘導し、丘上の安全な場所に非難させる。9人目の村人が避難を終えた時、さらに大きな津波が押し寄せ、稲むらの火も波に消されてしまう。

4. 「生きる希望」…津波により村には大きな爪痕が残り、変わり果てた光景を目にした儀兵衛は、故郷の復興のために身を粉にして働き、被災者用の小屋の建設、農機具・漁業道具の配給をはじめ、各方面で復旧作業にあたる。

5. 「広村堤防」…津波から村を守るために、村人とともに防波堤の築造に取り組み、4年がかりで防波堤を完成させ、海側には松の木を、土手にはろうそくの原料となるはぜの木を植える。

6. 「浜口大明神」…儀兵衛を「浜口大明神」としてまつり、神社建立の話が持ち上がるが、儀兵衛は計画に「断固反対」し断念させる。しかし、恩義を忘れられない村人は儀兵衛を「大明神様」と呼ぶようになる。

以上から、安政南海地震の予兆があったこと、濱口儀兵衛も津波に襲われたこと、「稲むら」に火を放ったのは津波に襲われた村人の誘導のためであったこと、津波の再襲により稲むらの火も消されてしまったこと、儀兵衛は故郷の復興のため「身を粉にして働いたこと、4年がかりで「広村堤防」が完成したこと、儀兵衛は「大明神様」と呼ばれ村人から慕われたことなどの「歴史」が確認できる。

一方、ラフカディオ・ハーンが記した「A Living God」は、全三節で構成されている<sup>8)</sup>。

第一節は、「大きさはいかようであれ、純神道風の社殿の建築はみなすべて同じ古風な様式に則っている」という文章で始まり、「shrine とか temple とかいう言葉で訳すよりも ghost-house と訳した方が意味がよく伝わるのではないかと

説明される「宮」「社」をはじめ、「神子（巫女）」や「燈明」など農山漁村における民俗信仰に関する記述が続く。そして、「昔、なにか格別に偉大な事、立派な事、賢明な事、勇敢な事をしとげた人は、生前どのように卑賤な身分の者であれ、誰でも死後、神と呼ばれ」た「生神様」について説明がされ、「その例として紀州の有田郡の百姓であった濱口五兵衛の例をあげることもできる。濱口は死ぬ前に神様にされたのである。そして事実それにふさわしい人だったと私は考えている（There was, for instance, Hamaguchi Gohei, a farmer of the district of Arita in the province of Kishu, who was made a god before he died. And I think he deserved it.）」<sup>9)</sup> という文章で結ばれる。

続く、第二節では、「濱口五兵衛の話に移る前に」、日本の多くの村にあり、法律と同等の力をもつ慣習について、「こうした慣習は年の功と呼ばれる年取った人々の社会的経験に基づいていた」ことや「天災や危急の場合に相互扶助する義務は村のあらゆる義務の中でいちばん厳守しなければならぬ義務であった」ことが説明される。

そして、「ここで濱口五兵衛の話に移る」として第三節が始まる。まず、冒頭で「津波」の解説が行われる。「有史以前から日本の海岸は、何百年かの不規則の間隔を置いて、巨大な潮の波に襲われた。この波は地表や海底火山の活動によって発生するものである。この恐ろしい突然の海面の隆起は日本語では「津波」と呼ばれる（From immemorial time the shores of Japan have been swept, at irregular intervals of centuries, by enormous tidal waves, — tidal waves caused by earthquakes or by submarine volcanic action. These awful sudden risings of the sea are called by the Japanese tsunami.）」。

続いて、「入江を見おろす小高い小さな平地の縁」にある家の縁側から五兵衛が「下の村で行われている祭の余興の準備を見おろしていた」時に起きた地震、その後の「海が陸地から沖へ沖へ走るように引」き「この地方の海岸で生れて以来誰もかつて見聞きしたことがなかった」干潮の描写に続き、以下のような文章が始まる。

濱口五兵衛もこうした事を前に見たことはなかった。しかし五兵衛は子供の時に父親の父親から聞かされたことをおぼえていた。そしてこの地方の海岸にまつわる言伝えはことごとく聞き知っていたのである。五兵衛には海がこれから何をしようとするのかももうわかっていた。下の村へ使をやるのにはどれだけ時間がかかるだろう。丘の上の寺の坊さんに頼んで大鐘をついてもらうには……だがその短い時間に五兵衛が考えた事を口に出して言うとしたら、もっとずっと長い時間がかかるにちがいない。五兵衛は孫息子に声をかけた、

「忠や、急ぎの用だ、大至急、松明に火を点けてくれ」

海岸近くの家々では嵐の夜や、神社のお祭りなどのためにたいてい松明が用意してある。子供はすぐに松明に火をつけた。すると老人はそれをもって畠に急いだ。そこには長者の家の全資産ともいべき稲むらが何百も出荷を待って並んでいる。山の斜面のいちばん近くの稲むらに近づくと濱口は老齢の体をせわしげに運んで、松明を次々とあてて稲むらに火を放ちはじめた。日に当って乾いていた稲の穂や稲の茎はぱちぱちとまるでほくちのようによく燃えついた。海からの風に煽られて火は陸の方に向かい、まもなく、一列また一列を稲むらは炎になって燃えあがった。数条の煙が空に向かって昇るとみるまに合して一本の大きな雲となり、渦巻状になって天に沖した。忠は、恐れおののいて、祖父の五兵衛の後を追いかけてながら叫んだ。

「お祖父さん！ どうしたの？ お祖父さん！ どうしたの？ 何するの？」

しかし濱口五兵衛は返事をしなかった。訳を言って聞かせるだけの暇はなかった。いま念頭にあるのは危険にさらされた四百余名の村民の命のことだけだった。しばらくの間子供は燃えさかる稲むらの火をこわい目をして見つめていたが、急に大声で泣き

出すと、祖父は気が狂ったと思って、泣きながら家へ駆け戻った。濱口は次から次へ稲むらに火を放ちついに自分の島の端まで来た。そこまで来るとようやく松明を捨て、そして待った。丘の上の寺の小僧は、燃えあがった火を見て、大きな鐘を力いっぱい撞きはじめた。村人は稲むらの火を見、鐘の鳴るのを聞いて、みな急ぎだした。濱口が見ていると人々は潮の引いた砂浜や海岸から、下の部落から、まるで蟻の群のように急いでやって来る。しかし気が気でない濱口の眼には村人の歩みはまるで実際の蟻の歩みのように遅々と感じられた。一瞬一瞬が濱口五兵衛には恐ろしいまでに長く感じられた、日は沈もうとしていた。入江の黝のよったような底も、その向うに続く青白い、斑にしみのついた広大なひろがりも、その素肌をあらわに示して、日没直前の蜜柑色の光線を浴びていた。そして海ははるか向うの水平線をさして依然として引き続けていた。

だが実際には濱口はそれほど長い間待ったのではなかった。二十名ほどの百姓の敏捷な若者が真先に助けに駆けつけると、すぐに火を消しかかろうとした。しかし長者は両手を左右にひろげて押しとどめた。

「燃えても構わん、ほっておけ」

と命令するように言った、

「このまま燃やしておけ。わしは村の者をみんなここへ呼び集めたいのだ。大変な事だ、大変な事なのだ」

村の人皆がそこへ登って来た。濱口は人数をかぞえた。若者や子供はいちはやくその場へ登って来た。元気な女や娘も少なからずやって来た。それに続いて年取った人たちの大半も。赤子を背負った母親も。年端のゆかぬ子供たちも。——年端のゆかぬ子供たちでも並んで水を運ぶ手伝いくらいはできるからだ。真先に駆け登った連中についてゆけなかった老人達も急な坂道を結構急ぎ足で登って来るのが見えた。集まった

人の数はだいたいぶふえたが、誰も何も知らされていないので、いかにもお気の毒といった驚いた顔付で、燃えさかる島の稲むらと長者の平静を失わぬ顔とを代る代る眺めた。やがて日は沈んだ。

「祖父は気が狂った、おっかないよう」

と皆から質問攻めにあった忠は啜り泣いた、「祖父は気が狂った。わざと稲むらに火をつけた。火をつけたのを俺は見た」

「別に気は狂っておらんが」

と濱口が大きな声で言った、

「しかし稲むらに火をつけたのはいかにも家の孫がいう通りわしじゃ……さあ皆集まったか？」

組長や戸主が自分の周囲や坂の下を見まわして、

「皆もうだいたい集ったが、しかしいったいこれは何事ですか」

と口々にたずねた。その時、

「来た！」

と老人が甲高い声をあげ、海の方を指さして叫んだ、

「さあこれでもわしが気が狂った、といえるかどうか」

たそがれの光を通してみな東の方を見た。すると薄暗い水平線に、長い、細い、かすかな線がまるで一条の海岸線の影のように見えた。そこにはもともと海岸線などのないところであった。——そしてその線は皆が見つめているうちにも厚みを増し、私たちが海から岸に近づく時海岸線が急に左右にひろがるように、その線も急激に左右にひろがった。それも比べものにならぬほど速くひろがった。というのもその長い黒いものは実は沖から引返して来た海であり、断崖のように聳え、風が宙を飛ぶよりも早く走ってきた。

「津波だ！」

と人々は叫んだ。しかし人々の叫びも、音も、またその音を聴く力も、すべて百雷よりも重い、なんとも名状しがたい衝撃で

もって打消された。盛りあがった巨大な波が、轟然たる力をふるって海岸におち当たったが、そのために岡という岡を震えが走ったように感ぜられた。そして稲妻が一瞬、雲全体を白く照し出すように、白いしぶきが幕状に立ちのぼった。その次の一瞬は、斜面を雲が湧くように昇ってくる荒れ狂った水沫以外は何ものも見えなかった。人々はその迫ってくるしぶきを前にして思わずたじろいで身を後へ引いた。人々がまた前方を見おろした時、自分たちの家があったあたりを海が恐ろしい白い顔をして暴れまわっているのが見えた。海はまた唸りながら引返してくると、通り様に大地の腸をひきちぎって行った。二度、三度、四度、そして五度、海は襲来したかと思うとまた引き退っていった。そしてそのたびに大波の数は減じていった。そしてやがて海は、その昔ながらの海に戻ると、そのまままたその元の場所にとどまった。まだ、暴風雨が過ぎ去った後のように、海面は立騒いでいたが。

丘の上で暫くの間誰ひとり口を利く者もいなかった。皆、言葉もなく、下の惨憺たる有様を見つめていた。投げ出された岩や、ぱっくりと割れた崖が身の毛もよだつような凄まじい光景を呈していた。かつて住居や神社のあったあたりが無一物となり、そのあたりに深海の底から引抜かれてきた海藻や砂礫が散らばっていた。それを見て皆茫然たらざるを得なかった。村は跡形もなく無くなっていた。畠も大半はなくなっていた。段々状の田圃さえもいつのまにか消え失せていた。そして湾の入江に沿って立ち並んでいた家並の中でいま目に見える残骸といえ、沖の海上で狂ったように揺れ続けている二軒の藁葺の屋根ばかりである。辛うじて死を免れた、というにわかにつのった恐怖心と、全てをなくしたという茫然自失の情のために、みな黙念と口も利けずに突っ立っている。やっとしまいに濱口がや

さしくこう言うのが聞こえた。

「だからわしは稲むらに火をつけたのさ」

長者の濱口五兵衛はいま皆の間で、一番貧しい村人にも劣らぬほど貧しい人として立っている。濱口の資産はなくなっていた。しかし濱口はそれを犠牲にすることで四百余人の命を救ったのだ。小さな忠が駈け寄って、祖父の手にすがって、先ほどはしたないことを口走った許しを乞うた。そしてそれを聞いた時、皆はなぜ自分がいま生残れたかをはっと悟って、自分たちを救ってくれた素朴な、自己を滅した濱口五兵衛の思慮分別に胸を打たれた。組長たちが進み出て、濱口五兵衛の前で地面に手をついて礼を述べた。村人たちも、組長に続いて、地面に手をついて深々と頭を垂れた。

すると老人はほろりと涙をこぼした。なかばは嬉しくもあり、なかばは年を取って弱っていた上、激しい緊張が解けてにわかにながゆるんだからでもあった。

「わしの屋敷は残っている」

と老人はようやく言葉を口に出して言った。そして忠の陽に焼けた頬ぺたを撫でるともなく撫でながらこう言った、

「まだまだ大勢泊れる。向うの丘のお寺さんも無事残っている。ここに泊れぬ人はあのお寺で雨風を凌ぐこともできる」

そういうと老人は自分の家をさして帰っていった。人々はあるいは啜り泣き、あるいは声を放って泣いた。

困窮の時期は長く続いた。当時は交通連絡の手段は十分発達していなかったし、救援は遠くから来るので時間がかかったからである。しかし生活が多少楽になってからも、人々は濱口五兵衛にたいする恩義を忘れなかった。五兵衛を金持にすることは村人にはできなかった。またたといできたところで、五兵衛が村人にそうした真似を許したはずもなかった。それに、贈物をしたというだけで皆の五兵衛を敬うの念を十分

言いつくせるものでもなかった。村人には五兵衛の内なる御魂は神ながらのものに思えたのである。それで村人たちはその後五兵衛を「濱口大明神」と呼ぶようになった。これ以上の名誉を老人に与えることはできないと思ったからだった。そして事実いかなる国へいってもこれにまさる名誉を生きている人間に与えることはできないのである。村の再建がなった時、村人はその御霊のために神社を建て、その正面の上に「濱口大明神」と漢字を金文字で記した額を掲げた。そして皆そこでお供物を捧げ、お祈りを唱えて濱口五兵衛を崇め尊んだのである。本人がそのことをどう感じたか私にはわからない。わかっていることといえば、老人はその後も丘の上の古い藁葺の家に、子供たちや、その子供たちのまたその子供たちと一緒に、以前と同じように心ゆるやかに質素な生活を送ったということだけである。(後略)

「歴史」と「A Living God」を比べたとき、濱口儀兵衛の名前(儀兵衛→五兵衛)をはじめ、年齢(数え35歳→老人)、地震の揺れ(激震→「長い、ゆっくりした。ふわっとした揺れ」)、稲むらに火を放った理由(津波に襲われた村人の目印→村人に津波襲来を知らせる)、津波が起きた日(安政東海大地震の翌日→祭りの日)など、いくつかの点でハーンによる脚色がほどこされていることがわかる。

## 2. 「稲むらの火」と「百年後のふるさとを守る」

一方、ハーンの「A Living God」を「翻作・翻案」した中井常蔵「津浪美談」(国語教育教材「稲むらの火」)は、地震(「これは、たゞ事でない」)→津波の予感(「津波がやつて来るに違ひない」)「四百の命が、村もろ共一のみにやられてしまふ」→稲むらの火(「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ」)→村人(「火事だ。荘屋さんの家だ」)→津波の襲来(「一同は、波にめぐり取られてあとかたもなくなつた村を、

たゞあきれて見下してゐた)」というストーリーが展開された後、「稲むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと気がつく」と、無言のまゝ五兵衛の前にひざまついてしまつた」という文章で終わる<sup>10)</sup>。

「稲むらの火」が、「A Living God」の第三節の前半部をベースに書かれていることがわかる。中井がハーンの作品に触れたのは、和歌山師範学校の専攻科在籍中、英語学習のテキストに『ラフカディオ・ハーン集』が使用され、そのなかに「A Living God」が収録されていたとのことであるが、「A Living God」の全文が収録されていたテキストであったか否かは定かではないという<sup>11)</sup>。

「稲むらの火」は、『小学国語読本』の「資料」として執筆されたことから予想されるように、中井にとっては郷土の偉人である濱口儀兵衛の、村や村びとに対する愛情・犠牲的精神・崇高な志などに力点が置かれていたことがわかる。そして、「濱口大明神」(「生神様」)に直接言及していないのは、中井が参照したテキストに「A Living God」の全文が収録されていたか否かということよりも、『小学国語読本』が1933年4月から使用され始めた「サクラ読本」であり、すでに『尋常小学修身書』や『小学国語読本』に明治天皇や広瀬中佐・橋中佐などの教材が掲載されたことから推察するに、「現人神」や「軍神」に対する配慮と考えられる。

他方、「百年後のふるさとを守る」は、全部で四つの節から構成され、教科書では11頁に及ぶ長文である<sup>12)</sup>。「伝記を読んで、自分の生き方について考えよう」という活動目標の作品で、授業の時期は六月上旬、時間配当は10時間となっている。

第一節では、まず「稲むらの火」の前半部が引用され、「この後、物語は、燃え上がる稲むらの火におどろいた人々が、高台にある五兵衛の家に集まり、津波の難をのがれるという結末に続いていく」という文章に続き、「五兵衛のすぐ

れた決断と行動は、読み手の心に大きな感動をよび起こしたが、同時に、津波のこわさや、すばやく高いところへにげることの必要性を教えることにもなった」という文章で終わる。

「稲むらの火」の引用から始まるのは、児童の興味・関心を高めるためと思われるが、河田には、もう一つの理由があったようだ。「そこに書かれていた津波の挙動があまりにもリアルであったために、読者にそれがあたかもいつも真実であるという間違った教訓も与えてしまいました。「津波はいつでも引き波で始まる」という誤解です。小学生時代にこの教科書で学んだ高齢者は、今でもそう信じていることが最近の調査でわかっています。でも、津波の第一波が押し波で始まる場合もあるのです」<sup>13)</sup>と『学習指導書』のなかで記している。

第二節は、五兵衛のモデルである濱口儀兵衛と広村における安政東海・南海地震の被害の様子、第三節は、「生きる希望」を失った村人を励まし、「広村堤防」の建造に邁進する儀兵衛の生涯と村の復興の様子が記される。

最後の第四節は、広村堤防完成 88 年後の 1946 年 12 月 21 日におきた和歌山沖地震（昭和南海地震）発生時の 4 m の津波浸水が「広村堤防」によって軽微ですみ、「百年後に大津波が来ても村を守れる堤防をという儀兵衛の切なる願いは、このとき、実を結んだ」という話の後、以下のような河田の言葉で終わる。

儀兵衛は、設計や土木工事の専門家ではない。そんな儀兵衛が、百年後にも役立つ堤防をつくったことは、まさに、おどろくべきことであり、偉大な功績である。そのうえ、災害後の対応と防災という観点から見ても、儀兵衛の堤防づくりには大きな意義がふくまれている。その一つは、物質的な援助だけでなく、防災事業と住民の生活援助を合わせて行ったことである。また、住民どうしが、たがいに助け合いながら、自分たちが住む所を守るのだという意識をもつようにながしたことも大きい。ほかのものにたよるのではな

い、自助の意識と共助の意識である。現代でもいえることだが、これがなくては、災害後の真の再生は望めない。今日ならば、ここに町や県、国などの公助が加わるのは当然である。さらに、百年後という長期計画の必要性と有効性を教えてくれたことである。安政の大地震のような大災害は、百年単位で起きる。百年先の子孫のためにということは、口では言えても、なかなかできることではない。それを、儀兵衛は行い、実際に大いに役立ったのである。

地震の多いこの国に生きるわたしたちは、儀兵衛がしたことや考えたことから、多くのことを学ぶことができる。また、学ばなければならぬだろう。今も広川町では、小中学生による堤防の手入れが続けられている。夏休みも終わりかけの暑い日、子どもたちは儀兵衛に感謝し、ふるさとの安全を願って、一心に草取りにあせを流す<sup>14)</sup>。

平成版の「稲むらの火」は、「浜口儀兵衛という素晴らしい人物が、人びとを津波から救い、同時に百年から百五十年間隔で将来も来襲する南海地震津波の脅威から地域を救ったという教訓を学び、彼に感謝し、世界最初の津波防波堤を村人と協力して作った彼の存在に誇りを持ちたいと思います」<sup>15)</sup>という河田の言葉からうかがえるように、「防災事業と住民の生活援助を合わせ」た「儀兵衛の堤防づくり」を「偉大な功績」と讃え、津波に対する日頃からの意識づけが主眼となった防災・減災教育と復興物語としての性格の方が強いことがわかる。このため、儀兵衛が被災した村人を雇用して堤防工事に従事させた話は、現在の被災者への緊急雇用対策や開発途上国での災害や紛争後に支援として始まった「キャッシュ・フォー・ワーク」の先例としても注目されたという<sup>16)</sup>。

## おわりに

本稿では、安政東海・南海地震と津波の襲来、その後の広村の復興事業における濱口儀兵衛（梧

陵)の行動に関する「歴史」が、ハーン作品「A Living God」、国語教育教材「稲むらの火」、現在の国語教育教材「百年後のふるさとを守る」として継承されていくなかで、どのような歴史や記憶が伝承されたのかについて考察した。

明治三陸地震を神戸で見聞したハーンは、実際に経験している災禍について思いをめぐらす方法として、直近の地震ではなく過去の出来事にさかのぼり、40年も前の安政東海・南海地震をめぐ一つの伝承のなかに「時間をこえて受け継がれてきた、民衆の智慧の結晶のようなものを感じとり」、「伝承の再話」という方法でもって、一人の村長が、「彼自身もまた古人が遺した津波の前兆を教える言い伝えに依りながら、混乱におちいりかけた村人を救い出すという物語」を「A Living God」として語り直した<sup>17)</sup>。

しかし、こうした読み解きは、決してハーン独自のものではない。昭和三陸津波のあと現地に入った山口弥一郎が1943年に記した、宮古市姉吉地区の人々が明治と昭和の二つの津波で得た教訓を「此処より下に家を建てるな」という記念碑として残したという記述(この結果、東日本大震災の津波で漁業関係施設はすべて流出したが、高台の集落は被災しなかった)で知られる『津浪と村』も、津波と直接関係がないと思われるような漁労習俗について多くのページを割いており、そこには津波からの復興は、それ以前からあった生活文化をベースにしなければありえないという山口の想いがうかがえる<sup>18)</sup>。

一方、中井は、「A Living God」をベースにしながらも、「もったいないが、これで村中の命が救へるのだ」と「自分の田のすべての稲むらに火をつけた」五兵衛の犠牲的かつ崇高な精神に共鳴し、その精神を児童に涵養すべく「津浪美談」を書いた。

そして、河田は、「自分たちの手で、子孫たちまで安心してらせる村をつくるんだ」という行動を通じて村人に津波被害への社会的対策の重要性和「自助の意識と共助の意識」を植えつけた儀兵衛の想いを次世代へ継承すべく「百年後のふるさとを守る」を執筆した。

ハーン、中井、河田の三人は、安政東海・南海地震と津波の襲来、濱口儀兵衛の行動をそれぞれの視点で読み解き、作品・教材として描いた。

では、私たちはどのように読み解き、社会科教育教材とすべきか。私は、「稲むらの火」の冒頭の文章に注目したい。

「これは、たゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことの無い無気味なものであつた。

この文章は、「A Living God」のなかで以下のように描かれている。

濱口五兵衛もこうした事を前に見たことはなかつた。しかし五兵衛は子供の時に父親の父親から聞かされたことをおぼえていた。そしてこの地方の海岸にまつわる言伝えはことごとく聞き知っていたのである。五兵衛には海がこれから何をしようとするのかもわかっていた。

儀兵衛(五兵衛)が、「津波がやつて来るに違ひない」と確信したのは、「この地方の海岸にまつわる言伝えはことごとく聞き知っていた」こと、すなわち地震・津波など災害に関する「この地方」の口碑・伝承を「おぼえていた」ためである。

地震が多発し、自然災害に侵される危険な地形にみちた日本列島には、災害に関する口碑・伝承や災害の歴史を記録する石造物が多く存在する。また、各地の「民俗誌」「生活誌」には、普通の人々の日常生活だけでなく、天変地異に直面した時に、人々はどのように生き抜いたのかといった「異常時」の民俗や生活が数多く描かれている。

「A Living God」「稲むらの火」から学ぶべきこ

とは、地震・津波などの災害に関する口碑・伝承をおろそかにしないことであり、教員が自分自身の地域（「この地方」）の「民俗誌」「生活誌」をみずからの問題意識で紐解き、「異常時」における人々の行動と心理を読み解き、新たな社会科教育教材として語り直し、次世代へ継承することではなかろうか。

当然のことながら、「稲むらの火」は、すべての教員が生活する地域を舞台とした防災・減災・国語教育教材ではない。地震・津波などの災害への対策は、ハーンや山口が試みたように、それぞれの地域や地域固有の生活文化に即して行うことが重要となろう。郷土教育の意義はここにある<sup>19)</sup>。

## 註

- 1) 府川源一郎『「稲むらの火」の文化史』（久山社日本児童文化史叢書 23, 1999年）。文部省が募集した『小学国語読本（尋常科用）』には、「一般教材」37編、「韻文」15編、「書翰文」1編の計53篇（46名）が「入選」を果たしたが、「津浪美談」は「一般教材」の部で「入選」したものの賞金は10円であった。「一般教材」のなかで唯一「賞金50円」で「入選」（賞金30円は9篇）したのは長野県北佐久郡北御牧尋常高等小学校訓導中澤誉勝の「スキー」という作品である（「スキー」と中澤誉勝のその後の行動に関しては、拙稿「二・四事件以後の信州教育素描」（『信濃』第64巻第11号、信濃史学会、2012年11月）を参照）。「韻文」の部の「入選」（賞金10円）には、福井県大野郡北郷尋常高等小学校訓導笠松一夫「肉弾三勇士」も含まれている（『彙報 教科書資料入選者』（『文部時報』第480号、1934年5月1日、48～49頁））。
- 2) 防災教育教材としての「稲むらの火」への関心は戦前から存在した（今村明恒『「稲むらの火」の教方に就て』地震予防評議会、1940年）。
- 3) 伊藤和明『津波防災を考える－「稲むらの火」が語るもの』（岩波ブックレットNo.656, 2005年）。
- 4) 若菜博「大震災と教育－避難と復興を中心に」（日本教育方法学会編『教育方法41 東日本大震災からの復興と教育方法－防災教育と原発問題』図書文化社、2012年）。
- 5) 濱口儀兵衛（梧陵）に関しては、杉村廣太郎編『濱口梧陵伝』（非売品、濱口梧陵銅像建設委員会、1920年）、杉村廣太郎編『濱口梧陵小伝』（濱口梧陵翁五十年年祭協賛会、1934年、）をはじめ多くの著作が刊行されている。また、広川町でも『義勇奉公の章でたどる 浜口梧陵の生涯』（発行者・刊行年未記載）を発行している。
- 6) 展示要覧『稲むらの火の館』（濱口梧陵記念館、2007年）。
- 7) 和歌山県広川町発行『稲むら燃ゆ－海嘯と闘った男・浜口梧陵の軌跡』（1998年）。
- 8) 小泉八雲「生神様」（平川祐弘編『小泉八雲名作選集 日本の心』講談社学術文庫、1990年）209～233頁。
- 9) Lafcadio Hearn, Gleanings in Buddha-Fields. Houghton Mifflin and Company, 1897, P16.
- 10) 「第十 稲むらの火」（『小学国語読本（尋常科用）巻十』文部省、1937年）52～57頁。本文の他に、「五兵衛が稲むらに火をつける」（55頁。ただし『初等科国語』には掲載されていない）と「津波」（58頁）の2枚の挿し絵も掲載された。
- 11) 前掲註1）府川源一郎『「稲むらの火」の文化史』62頁。
- 12) 河田恵昭「百年後のふるさとを守る」（『小学校国語 五 銀河（上）』光村図書出版、2011年）60～70頁。
- 13) 河田恵昭「筆者の言葉 大切ないのちを災害でなくさないために」（『小学校国語 学習指導書 五 銀河（上）』光村図書出版、2011年）178頁。
- 14) 広村では安政南海地震の津波により犠牲になったに人びとの霊をなぐさめ、濱口梧陵

の偉業と徳をしのび、安政南海地震50回忌にあたる1903（明治38）年旧暦11月5日に広村堤防への土盛りを始めた。これが現在も行われている「津浪祭」である。「津浪祭」では、小学校6年生と中学校3年生が土を持って土手に盛り上げていく行事が続いている。現在は、ビニール袋に土を入れて持っていく儀礼的な色彩が濃い、以前は天秤で土を運んだという（濱口梧陵記念館津波防災センター）。

- 15) 前掲註13) 河田恵昭「筆者の言葉 大切ないのちを災害でなくさないために」179頁。
- 16) 林勲男「防災の英知を海外に - 津波防災教

材としての「稲むらの火」(『月刊 民博』第36巻第9号, 国立民族博物館, 2012年9月) 8頁。

- 17) 今福龍太「なみふる思想 - 震える群島の起源」(今福龍太・鵜飼哲編『津波の後の第一講』岩波書店, 2012年) 242頁。
- 18) 山口弥一郎『津浪と村』(恒春閣書房, 1943年, 石井正己・川島秀一編『山口弥一郎著 津浪と村』三弥井書店, 2011年)。
- 19) 拙稿「教育学と民俗学」(『日本民俗学』第277号, 日本民俗学会, 2014年2月) 216～217頁。